



筑紫女学園大学リポジット

「日本の伝統色の特質についてII」：
日本の伝統色と中国の伝統色との比較から

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 文子, OKAMOTO, Ayako メールアドレス: 所属: |
| URL | https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/711 |

『日本の伝統色の特質についてII』

— 日本の伝統色と中国の伝統色との比較から —

岡本文子

An Analysis of the Characteristics of Japanese Traditional Colors II

Ayako OKAMOTO

1. 緒言

「日本の伝統色の特質についてI」でのべたように、四季折々に移ろう日本の自然が織り成す美しさが、日本の美意識を形成する上で精神的支柱ともいうべき役割を果たしてきたことは言うまでもないが、気候・風土のみならず、現代に至る長い歴史の中で、異文化との交流もまた日本の美意識の形成に影響を与えた要因である。

「日本の伝統色の特質についてI」では、フランスの伝統色との比較を通して、日本に継承されてきた日本の伝統的美意識の概要を解くことができた。それは気候・風土も全く異なり、歴史的に見ても、近世までは比較的日本とは交流の少なかった文化圏との比較を通して、日本の美意識、つまりここでは色彩的感性をより鮮明に浮き彫りにしようとする意図があった。

「日本の伝統色の特質についてII」では、さらに気候・風土は異なるものの、歴史的に見ると海を隔てて隣国という地理的条件からも古来より交易があり、日本文化の中にも大陸風と称される時期があったように、日本文化に多大な影響力があったと考えられる中国の伝統色を取り上げ、比較検討を試みたい。

日本文化の流れを端的に表現するならば、日本文化の歴史は、大陸風と国風に例えられるような、模倣と自立を繰り返してきたと言えるであろう。今や日

本は先進国の一員となり、これまでの経済的進展とともに文化的にも近世以降はむしろ欧米の文化に目を向けてきた傾向にあり、経済的自立は文化的自立をも意味した。

現代の日本の文化は三つの側面を有している。一つには全く欧米諸国と同化した部分、二つには「東洋的」とエキゾチックな意味で称される東洋圏の共通性を有していること、三つめはは日本文化の民族的独自性である。色彩感覚、つまり色彩を媒体とする美意識は、それら三つの側面のいずれにも関わりの深いものである。

「日本の伝統色の特質についてⅠ」では、フランスの伝統色との比較を通して、日本の伝統色の特質について、その概要を把握できたが、さらに本論において、古来より歴史的に見ても日本文化に多大な影響を与え、多くの文化を共有してきた中国の伝統色との比較を試みることは、日本の伝統色に色彩を介して具現化された、日本的美意識をより深く掘り下げて解明できるものとする。

2. 方法

2.1. DICカラーガイド「日本の伝統色」300色を要素分析の対象とした。

2.2. 「日本の伝統色」との比較のため、DICカラーガイド「中国の伝統色」320色もまた要素分析の対象とした。

2.3. 対象をコンピュータでスキャンし、さらにUPシリーズ・MODAのカラーピッカーを用いて抽出した各色の要素分析を行った。カラーモデルにはCMYカラーモデル、RGBカラーモデル、そしてHSVカラーモデルの3種類が用意されているが、今回はHSVカラーモデルを採用した。HSVカラーモデルでは、H（色相）はカラーホイール（色相環）上の位置を示し、純色の「赤」を0度とする。国際的に普及しているマンセルシステム10色相環を基本としており、JIS（日本工業規格）の表示法

としても制定されている。本論では系統を示す色名は和名の漢字表記とした。(表1)

表1

| | | | |
|-----------|-----|-----------|-----|
| 0°～17° | 赤系 | 198°～233° | 青系 |
| 18°～53° | 黄赤系 | 234°～269° | 青紫系 |
| 54°～89° | 黄系 | 270°～305° | 紫系 |
| 90°～125° | 黄緑系 | 306°～341° | 赤紫系 |
| 126°～161° | 緑系 | 342°～360° | 赤系 |
| 162°～197° | 青緑系 | | |

S (彩度) については百分比で表記され、S = 0は無彩色を示し、S = 100は純色を示す。同様にV = 0も百分比で表記され、V = 0は黒を示し、V = 100は白を示す。

- 2.4. 対象とした「日本の伝統色」について、その要素分析の結果から、色相の偏りおよび傾向を検証した。
- 2.5. 対象とした「中国の伝統色」について、その要素分析の結果から、色相の偏りおよび傾向を検証した。
- 2.6. 対象とした「日本の伝統色」について、彩度・明度およびそれらを総合したトーンの傾向を検証した。
- 2.7. 対象とした「中国の伝統色」について彩度・明度およびそれらを総合したトーンの傾向について検証した。
- 2.8. 上記4～7から、日本の伝統色の傾向と中国の伝統色の傾向を比較検討し考察した。

3. 結果

3.1. 「日本の伝統色」の色相における要素分析の結果は以下の通り。(図1)

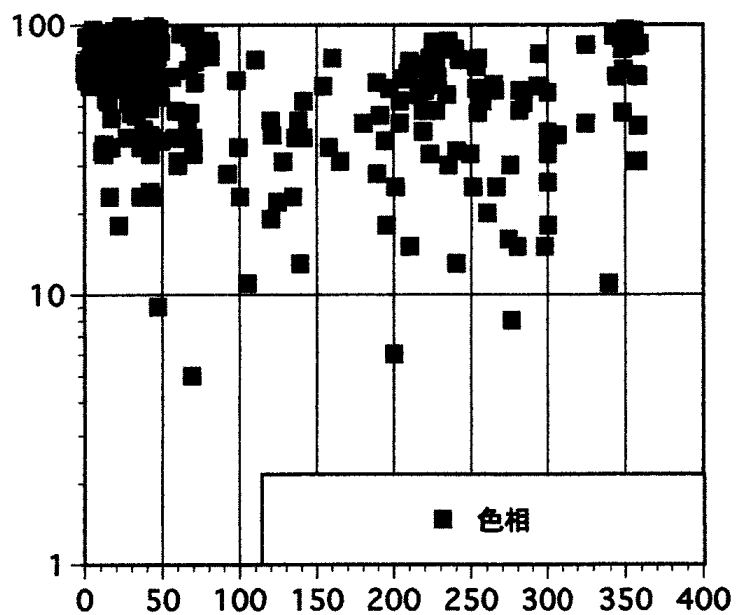


図1 日本

3.2. 「中国の伝統色」の色相における要素分析の結果は以下の通り。(図2)

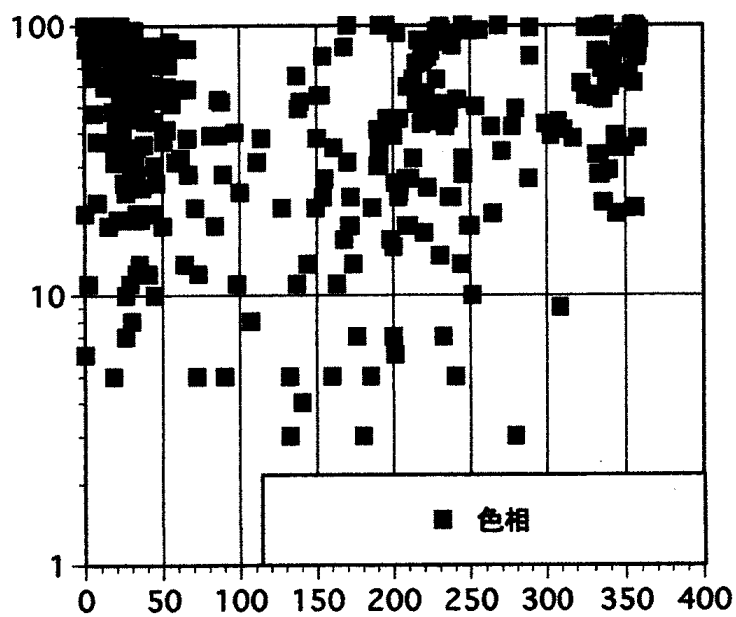


図2 中国

3.3. 「日本の伝統色」における彩度と明度の分布についての分析結果は以下の通り。(図3)

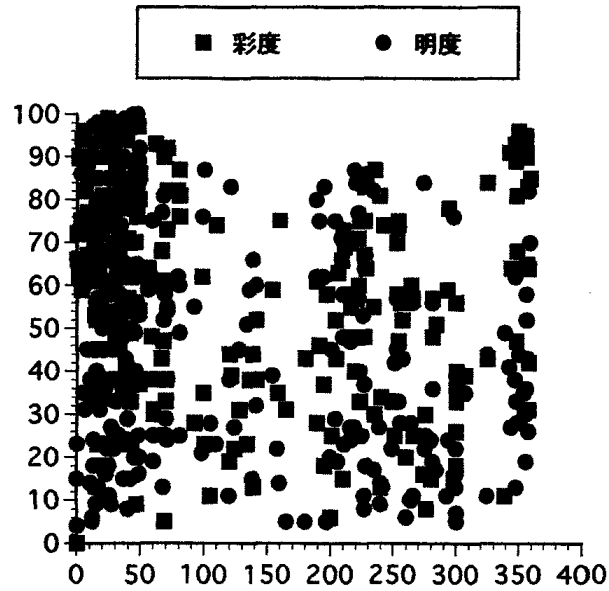


図3 日本

3.4. 「中国の伝統色」における彩度と明度の分布についての分析結果は以下の通り。(図4)

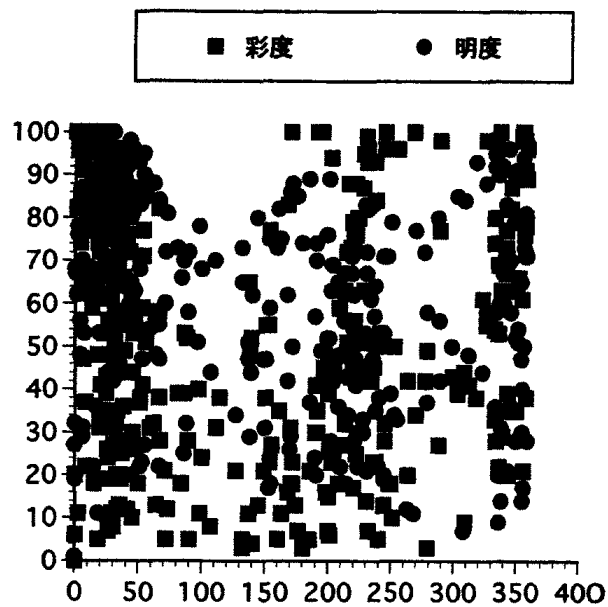


図4 中国

3.5. 「日本の伝統色」の色相・彩度・明度の要素分析結果を3次元で示した。(図5)

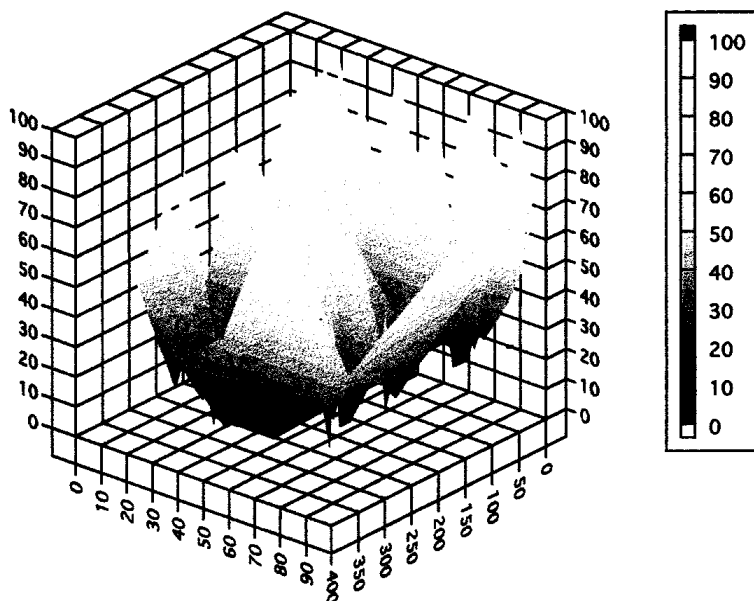


図5 日本

3.6. 「中国の伝統色」の色相・彩度・明度の要素分析結果を3次元で示した。(図6)

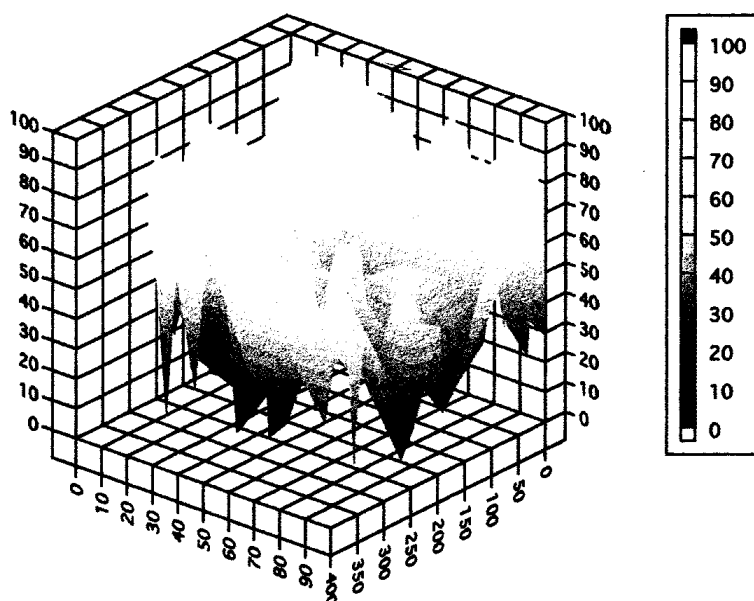


図6 中国

3.7. 色相の系統別に「日本の伝統色」と「中国の伝統色」におけるそれぞれの特徴について比較を通して検証した。

《赤系》

まず、色数を比較すると、日本81、中国68であり、どちらも非常に多いが、日本の方がより多くなっている。どの層が多いかを見ると、明度が高く、彩度が中程度のペールトーンが多い。さらに両者を比較して色数が多いだけに共通する色も多いが、日本にのみ見られる色は日本の特徴を具備する。鶉色（ときいろ）、洗朱（あらいしゅ）、桃花色（ももいろ）、紅梅色（こうばいいろ）、浅緋（うすあけ）などの色は、桃や梅などの花をイメージさせる色で、彩度が60前後と中程度のしかも明度の高い、明るいが派手ではなく優しい印象の色である。

しかし日本の伝統色に明度・彩度ともに高い、鮮烈な色が無い訳ではなく、むしろ中国よりも多い。ただ内容を見ると、比較的新しい色が多く、化学染料の普及以降の色と考えられる。中国の伝統色では明度も彩度も高い色は少なく、彩度の高い色は明度がやや低く、濃厚な印象の色が多くなっている。また中国の伝統色では赤系の中でも、金紅（チンホン）、章丹（チアンタン）、桔紅（チューホン）のように、現代でいうオレンジみの色に特徴が認められる。日本の伝統色の中には見られない色である。中国の伝統色では明度が高く彩度が中程度のトーン（ペールトーン）から、彩度が高く明度が中程度のトーン（ディープトーン）に変化する中間のライトトーンやグレイッシュトーンが少なく、薄い色、濃い色という明暗がはっきりしているのも特徴である。

日本の伝統色と中国の伝統色で共通する点は、ダークグレイッシュなトーンからグレイッシュなトーンにかけてである。ただし、中国ではライトグレイッシュなトーンやソフトなトーンは少なく、日本に多い。

《黄赤系》

日本、中国ともに色数は多く、日本78、中国90となっている。赤を含む、赤紫系・赤系・黄赤系を合計すると、日本は167、中国は179となり、3分類で全体の半数を上回ることになる。

内容的には赤系の傾向とはやや異なり、低明度、低彩度のゾーンでは日本も中国もダークなトーンは少なく、ダークグレイッシュなトーンも多くはない。むしろグレイッシュなトーンとライトグレイッシュなトーンが両者ともに見られる傾向である。日本の伝統色においてグレイッシュなトーンが多いのは、江戸時代に鼠色が大流行したという背景に起因することは十分考えられるが、中国の伝統色においても同様の傾向が見られるのは意外な結果である。加えて現代でいうベージュ系の色も多い。

《黄系》

黄系の色数は日本22，中国22，と同数である。その内容を見ると、中国の伝統色の方が明るい印象で、明度の高い色が多く、色相は黄赤系寄りである。トーンではやはりダークトーンやディープトーンが見られない。それに対して日本では、明度の高い色が少なく、明度が中程度で彩度も中程度から高彩度のダルトーンからディープトーンが多くなっており、ダークなトーンは見られない。ちなみに日本の明度の最高値は75，最低値は7，彩度の最高値は100，最低値は29。（うち彩度100の色は全22色中7色にのぼっている。また中国の明度の最高値は95，最低値22，彩度の最高値は87，最低値は5となっている。

《黄緑系》

黄緑系の色数は日本10，中国7，と両者ともに少なく、それらの色における日本の明度の最高値は82，最低値は0，彩度の最高値は100，最低値は0。（うち彩度100は全10色中4色，彩度90以上では半数にのぼる。）また彩度25～94の間には色が出てこない。中国を見てみると明度の最高値は78，最低値は44，彩度の最高値は40，最低値は5となっており、中国の伝統色ではライトグレイッシュトーンからグレイッシュトーンの色で構成されている。一方、日本の伝統色では高彩度の色が多く、トーンもさまざまである。

《緑系》

緑系の色数は日本12，中国18となっている。その内容を見てみると日本では明度の最高値80，最低値0，彩度の最高値100，彩度の最低値0である。ただし明度・彩度ともに0の黒を含んでいるため、それを外すと最低値は25である

ので、低彩度の色は黒1以外は無いことになる。中国では明度の最高値82，最低値17，ただし明度50以下が半数を占めている。彩度の最高値は77，最低値は3，となっている。このことから、中国の伝統色では黄緑系と同様に、ライトグレイッシュからグレイッシュにかけてのトーンが多く、ダークなトーンやビビットなトーンは見られない。日本の伝統色との共通点としては、高明度色がなくパール，ライト，ブライتناトーンが見られないことが挙げられるが、一方日本の伝統色には高彩度の色も見られ、ライトグレイッシュなトーンはむしろ少ない。

《青緑系》

青緑系の色数は日本7，中国20であり、日本の伝統色では、この青緑系が最も少ない。中国の伝統色では、最も少ないのは黄緑系であった。その内容を見ると、日本では明度の最高値は82，最低値22，彩度の最高値100，最低値11，となっているが、彩度50～100が7色中4色を占めており、彩度50以下の色では全て明度の高い色との組み合わせになっている。彩度100のストロングあるいはディープなトーンの色は、その名称から伝統色の中でも比較的新しい色である。明度66～82にかけてのソフトトーンからライトグレイッシュトーンにかけての色は、その名称から全て平安時代もしくはそれ以前からの伝統色である。中国の場合、明度の最高値は89，最低値は20，彩度の最高値は100，最低値は3，ただし彩度83～41の間に色はなく、パールトーン寄りのライトグレイッシュからグレイッシュなトーンと、ディープなトーンに偏っており、クリアな印象の色が多い。

《青系》

青系の色数は、日本38，中国44，であり、黄赤系，赤系に次いで多くなっている。内容的に見ると、日本では明度の最高値88，最低値0であり、彩度の最高値100，最低値0となっている。その特徴をまとめると、90以上の高彩度色はなく、明度は高明度から低明度までほぼ均等に存在する。彩度は高彩度色が多く、低彩度色は少ない。トーンでは高彩度で中明度のストロングトーン，高彩度で低明度のディープトーン，中彩度で中明度のダルトーンやソフトトーン，

低彩度で高明度のライトグレイッシュトーン，および黒に近い色が見られる。

中国の場合，明度の最高値は89，最低値18，彩度の最高値99，最低値6，となっており，90以上の高彩度色もなく，17以下の低明度色もない。全体的に中明度色が多く，特に40～50の層が最も多く，彩度は高彩度から低彩度までばらつきがある。

両者を比較すると，中国の方がライトグレイッシュ，グレイッシュなトーンが多く，日本の方がクリアな印象の色が多い。クリアな印象の，より鮮明な高～中明度色群の名称を見てみると，古代からの色，中世の色，近世の色，近代の色など入り混じっており，少しずつ色みを変化させながら，色数を増加させてきたことが窺える。

《青紫系》

青紫系の色数は，日本24，中国21であり，多くはない。その内容を見てみると，日本では明度の最高値87，最低値7，彩度の最高値100，最低値3であり，中国の場合，明度の最高値83，最低値11，彩度の最高値100，最低値5となっている。ここでの日本と中国の色数に差は認められないが，青系の特徴と同様に，中国の伝統色にはライトグレイッシュおよびグレイッシュなトーンが多く，高彩度の色がほとんど見られない。日本の伝統色の方が高彩度の色が多く，ライトグレイッシュなトーンでは共通する色も認められるが，クリアな印象の色が多いのが特徴である。

《紫系》

紫系の色数は日本20，中国9と，両者ともに少なく，特に中国の伝統色に色数は少ない。その内容をみると，日本の明度の最高値87，最低値0，彩度の最高値100，最低値0，対して中国の明度の最高値85，最低値37，彩度の最高値98，最低値27となっており，日本の伝統色の場合高明度では低彩度，中明度では中彩度，低明度では高彩度の傾向があり，トーンではペールトーン，ソフトからダルトーン，ダークからディープトーンに偏りがある。一方中国の伝統色の場合，高明度で中～低彩度，中明度で高彩度，中明度で中彩度の傾向があり，トーンではソフトトーン，ストロングからディープトーン，ダルトーンに偏り

が認められ、これは青系・青紫系の結果と逆の結果となっている。

《赤紫系》

赤紫系の色数は、日本 8、中国 21 となっており、日本で極端に少ない。その内容を見ると、日本の明度の最高値 86、最低値 9、彩度の最高値 100、最低値 5、(ただしコスモス色 1 色を除くと全て 42 以上) 中国では明度の最高値 95、最低値 7、彩度の最高値 100、最低値 9、(ただし彩度 9 のタンオウファーを除くと全て 22 以上) となっており、ここでも紫系と同様に青系・青紫系と逆の結果になっている。

- 3.8. 前項で述べた包括的特質が顕著な例として、色相 $18^{\circ} \sim 53^{\circ}$ (黄赤系) および $198^{\circ} \sim 233^{\circ}$ (青系) について図に示した。(図 7 ~ 10)

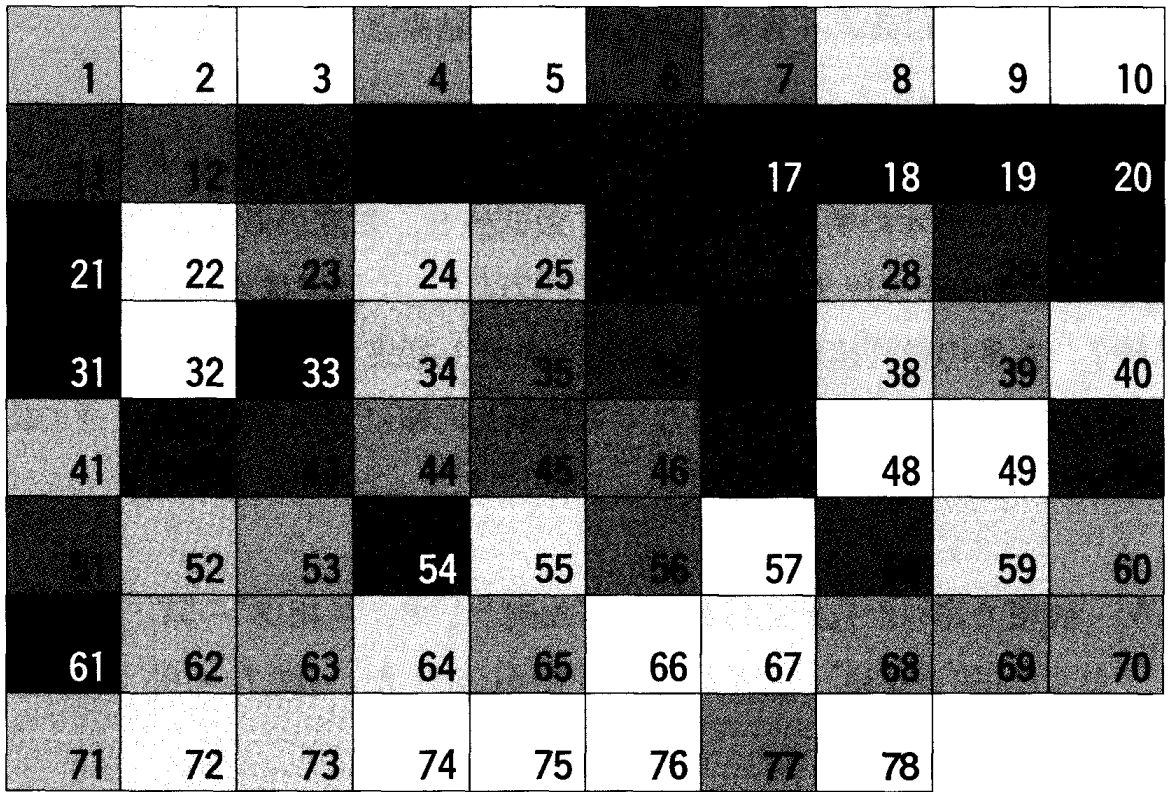


図7 日本の伝統色（色相18°～53°）

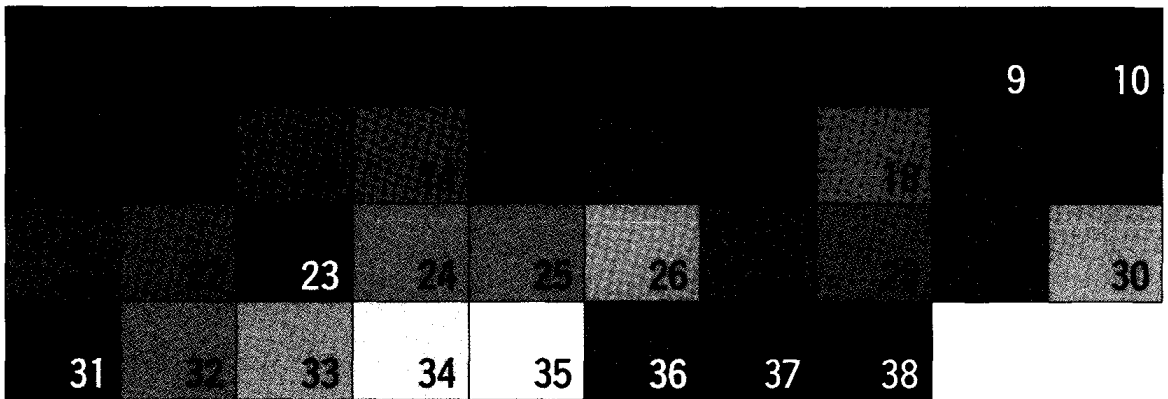


図9 日本の伝統色（色相198°～233°）

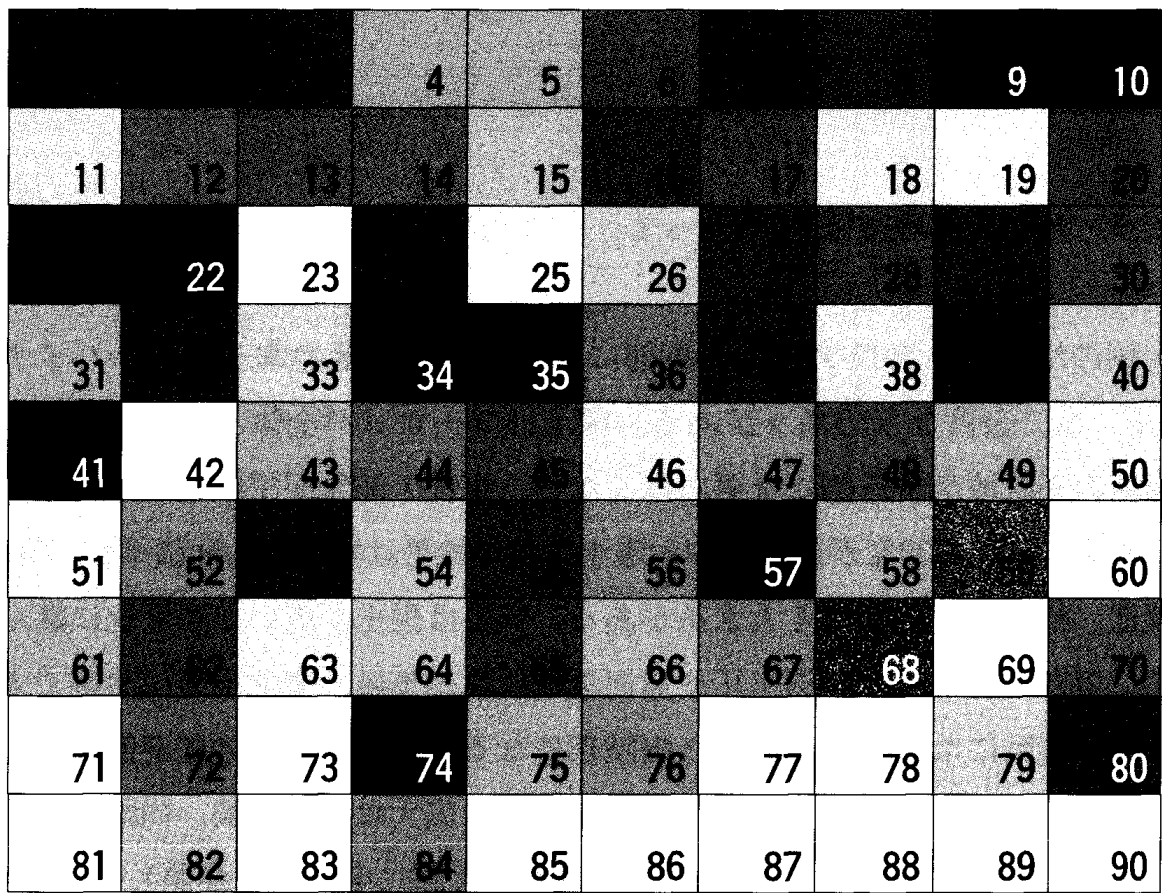


図8 中国の伝統色（色相18°～53°）

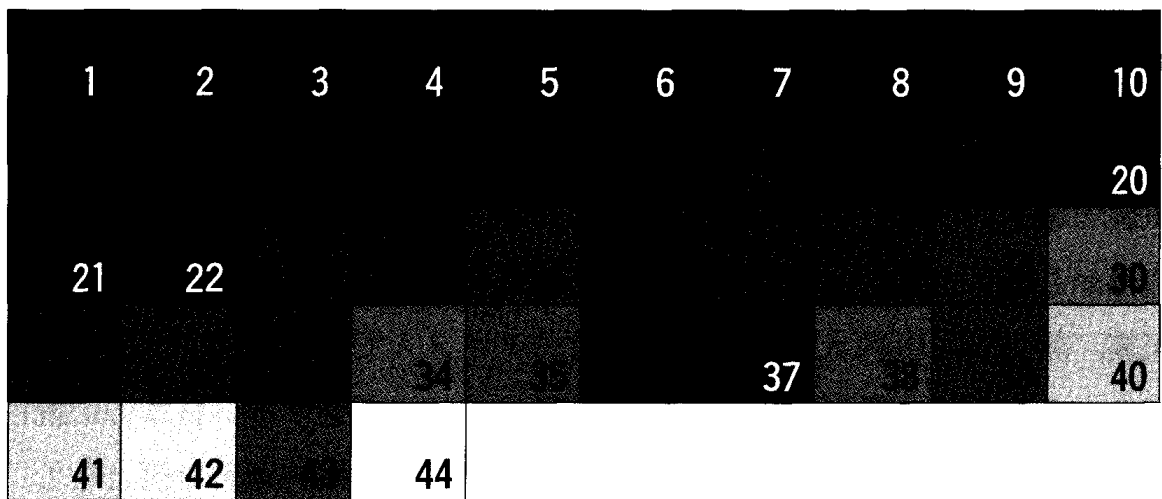


図10 中国の伝統色（色相198°～233°）

4. 結論

まず、結論を考察するにあたって、日本と中国の概要について述べておきたい。

中国の地勢は、アジア大陸の東部に位置し、大陸部の本土のほかハイナン（海南）島、台湾などの島々がある。国土はヨーロッパ全体とほぼ等しく、東部南海の平原地帯から西に次第に高くなり、東部の36%が平原と丘、北西の30%が高原、南西の30%が山脈。中国本土の海岸地帯は豊かな大沖積平野。黄河、黒龍江、揚子江、珠江の4大水系がある。気候は国土が広いため変化に富んでいる。南部は熱帯気候、揚子江や黄河流域は温帯気候、東北地方は冷帯で大陸性の強い気候になっている。また内陸部になるにつれて乾燥の度が高くなりテンシャン山脈からタリム盆地にかけての地域は広大な砂漠気候、内陸山岳地帯は、ツンドラ気候・高山気候となっている。言語は中国語（漢語）、民族は漢族が92%でその他多数の民族がいる。

日本の場合、地勢はアジア大陸の東縁、太平洋の北西に連なる花采列島、環太平洋造山帯の一部で、列島には多くの摺曲山脈、火山帯、地震帯断層線が走り地帯構造は複雑である。気候について見てみると南部は温帯気候、北部は冷帯気候である。モンスーンの影響が強く、6～8月は南東モンスーンにより多量の雨がもたらされる。言語はアルタイ語系の日本語、民族はアジア人種の日本民族、朝鮮人、中国人、北海道に少数のアイヌ人である。（注1）

このような両国の概要を踏まえて、結果について考察する。日本の伝統色と中国の伝統色の特質について、その共通点と差異が比較的顕著な例として、図7～10を例示した。まず色相別の色数では赤系・黄赤系の色数が最も多く、圧倒的である。そして色数が少なかったのは黄緑系であり、前後の黄系・緑系も少なく、これらは日本、中国ともに共通する特質である。このことは「日本の伝統色の特質についてI」でも述べたように、フランスの伝統色にも共通している。つまり気候・風土や民族、歴史的背景に関わらず識別が容易である、あ

るいは日常の生活を通して受容しやすい色相が共通しているとも窺える。どのような生活圏でも人々は生活のあらゆるシーンで色彩に接している。自然界の息吹や風物を眼や肌で感じ、色に囲まれた家屋で生活を営み、インテリアに趣を凝らし、多彩な服飾品を身にまとう。そのような日常の繰り返しが生活文化を築いてきたのである。日本の伝統色の色名を見ても、その多くは植物、それも花の名称が用いられている。そのことは自然界の植物、花々に対する愛着ともいうべき嗜好を示している。一方、植物の緑は実際の色相で言えばほとんど黄緑の系統であって、青みの緑や青緑のものはないと言われている。今回の結果からも、青緑系の色数は極めて少なく、自然界の実在と併せて考えると興味深い。また中国の伝統色では紫系の色数が少なく、青紫系・赤紫系を含めて考えても、「紫」と明瞭に認識される色が少ないのは、中国でも日本でも古来より高貴な色として貴ばれてきたことを思い起こすと、以外な結果である。日本でも中古までは「紫」が色の代表のように考えられていた。それは単に「濃き色（こきいろ）」といえ濃い紫を示したことにも表れている。日本の伝統色においても、紫系の色数は多くはないが、平安時代から継承されてきている色名に注目すると、それらの中では紫系の色の割合は多くなっている。このことは色数は少ないものの紫系の色に対する愛着の深さを示すものと言えるであろう。天然染料の時代には染料の原材料によって、入手の困難さの度合いが異なり、そのことが色数に影響を与える一因とも推察される。

一方、フランスの伝統色との比較（「日本の伝統色の特質Ⅰ」）においても指摘したように、日本の伝統色の特質として、ライトグレイッシュからグレイッシュなトーンの多いことが挙げられ、中庸の曖昧さを嗜好し、微妙な色の差異を読み取り、駆使して楽しむ、繊細な感性が理解された。この点について中国の伝統色と比較すると、フランスの伝統色との比較と考え合わせても、多くの類似性が認められた。このことは日本の伝統色のこのような特質が単に気候・風土といった自然界の外的要因のみに拠るものではないことを示すものである。さらに俯瞰的にみてもフランスの伝統色に比べて、中国の伝統色との共通性が明確に認識されるが、その差異について抽出するならば、日本の伝統色におけ

る透明感のあるクリアな印象を備えた色に特質があることが比較の結果から新たに認められた。結果の項でも述べたように、突出した特質ではないものの、古代から継承され、古代から近代に至る、各々の時代に少しずつそして確実に色数を増してきた。このことは天然染料から化学染料への移行も要因としては否定できないものの、時代毎に定着してきた経緯をみると、そればかりとは言い切れない。時代を経る中で鮮やかさばかりでなく、よりクリアな色に美を求めた探究心と感性が窺える。

また、伝統色の色名には周知のように、自然の風物を題材にしたものが多く認められるが、それらもまた日本的美意識を知る指標でもある。例えば「雀茶」という色は雀の頭部の色から名づけられており、「葉裏色」は葛の葉のように葉の表と裏の色の異なるものに着目して名づけられている。どちらも観察的で、繊細な感受性を読み取ることができる。今後はさらに、日本の伝統色の特質と色名についても調査し、色彩を介した日本的美意識について理解を深めていきたい。

注1) データブック オブザワールド 二宮書店

資料

- DIC カラーガイド日本の伝統色
- DIC カラーガイド中国の伝統色

参考文献

- 日本色彩大鑑
松本宗久 河出書房
1993. 11. 30
- カラー・イメージ事典
小林重順／監修
日本カラーデザイン研究所／編
講談社
1983. 12. 10

- 色彩演出事典
北島 耀／編
セキスイインテリア株式会社
1990. 5. 8
- 色彩自由自在事典
末永蒼生 晶文社出版
1994. 10. 15
- 日本の伝統色の特質について I
— 日本の伝統色とフランスの伝統色との比較から —
岡本文子 筑紫女学園短期大学紀要 第36号
2001. 1. 31